

学位論文要約

罪悪感の機能についての再考  
—罪悪感と道徳的自己の対応モデルの構築—

広島大学大学院教育学研究科  
教育人間科学専攻

D154263

古川 善也

## 目 次

### 第 1 章 本研究の背景

- 第 1 節 罪悪感の基本的特徴
- 第 2 節 罪悪感の対人関係の維持機能
- 第 3 節 罪悪感の機能についての再考
- 第 4 節 罪悪感と道徳的自己
- 第 5 節 本研究の目的

### 第 2 章 罪悪感と道徳的自己の対応関係の検証

- 第 1 節 罪悪感の対人関係の維持機能についての再検討(研究 1)
- 第 2 節 道徳的自己の低下に着目した検討(研究 2)
- 第 3 節 道徳的自己の高揚に着目した検討(研究 3)
- 第 4 節 罪悪感による道徳性追求への影響の検討(研究 4)
- 第 5 節 罪悪感による道徳行動への影響の検討(研究 5)

### 第 3 章 総合考察

- 第 1 節 本研究の成果
- 第 2 節 今後の課題

### 引用文献

## 第1章 本研究の背景

### 第1節 罪悪感の基本的特徴

罪悪感は、規範を破ったり、他者に被害を与えたりした際に自身の行動への否定的な評価から生じる自己意識的感情と定義される(Tangney & Dearing, 2002)。罪悪感を感じた人は自身の行動の責任を受け入れ、償いや自分を罰することを望み(Roseman et al., 1994, Tracy & Robins, 2006), 向社会的行動を行いやすい(Baumeister et al., 1994)。

### 第2節 罪悪感の対人関係の維持機能

罪悪感を含めたネガティブ感情は、個人の目標や関心が脅かされていることへの危機シグナルであり、当該の問題を解消するための行動を動機づける(Zeelenberg & Pieters, 2006)。この点について Baumeister et al. (1994)は、罪悪感が向社会的行動を動機づけること、そして向社会的行動は対人関係の修復・維持に寄与することから、罪悪感「対人関係の維持機能」を持つ感情であると主張している。この主張は多くの実証研究で支持されている(e.g., Cryder et al., 2012)。

しかし、この主張とは整合しない知見も少なくない。これらの知見は「罪悪感の生起に関する研究」と「罪悪感の行動との関連についての研究」に大別できる。前者の知見からは、対人関係上の危機が罪悪感喚起の必要条件ではないことが示唆される。例えば、Eskine et al. (2013)は不道德な人物との接触により罪悪感が引き起こされることを示している。また、Zhang et al. (2017)は道徳に関する他者との比較からも人は罪悪感を感じることを明らかにしている。これらの知見は、他者への被害に伴う対人関係上の危機がなくとも罪悪感が生起することを示すものである。

後者の知見からは、罪悪感が被害者との特定の関係の修復・維持には繋がらない行動とも関連することが示されている。例えば、罪悪感第

三者に向けた向社会的行動を生じさせる(Carlsmith & Gross, 1969)。また、身体洗淨(e.g., 手を洗う)によって罪悪感が低下し、向社会的行動も生じにくくなる(e.g., Xu et al., 2014)。

上記2つの観点からの知見は、対人関係の維持機能という単一の観点からでは罪悪感という感情の役割を明らかにできない可能性を示唆している。感情が人間の社会行動における説明・予測・制御に資すること(大平, 2010)を考慮すれば、罪悪感の機能について包括的・整合的に理解するための新たな観点が必要と言える。

### **第3節 罪悪感の機能についての再考**

罪悪感の喚起要因は他者に被害を与えることだけでなく、自身の内的基準を破ることも強調されている(e.g., Swedene, 2005)。特に、Swedene (2005) は、罪悪感とは道徳に反したことを知らせるシグナルとなると主張している。この点と「罪悪感の生起に関する研究」からの知見を踏まえると、罪悪感とは自分自身が道徳的であるかの自己評価(道徳的自己; e.g., Zhong et al., 2009)への脅威から生じる可能性が考えられる。この観点に基づき、本研究では道徳との関連から、罪悪感の機能について検証することを目的とする。具体的には、罪悪感と道徳的自己(Zhong et al., 2009)の対応関係を仮定し、罪悪感が道徳的自己を維持する機能を持つことを中核に据えた罪悪感と道徳的自己の対応モデルの構築を目指す。

### **第4節 罪悪感と道徳的自己**

道徳的自己(moral self)は、自分自身が今現在どれだけ道徳的であるかの評価であり、自身の行動に応じて変動していく(Zhong et al., 2009)。道徳的自己の低下は一つの脅威であり、人は心理的苦痛を経験する(West & Zhong, 2015)。罪悪感はこの心理的苦痛に相当するものと考えられる。

加えて、向社会的行動や身体洗淨などの罪悪感が引き起こす行動(e.g.,

Cougle et al., 2012; Cryder et al., 2012)は、低下した道徳的自己の回復にも寄与する(e.g., Gneezy et al., 2012; Zhong et al., 2010)。この点と「罪悪感の行動との関連についての研究」からの知見を踏まえると、罪悪感は道徳的自己の回復のための行動を引き起こすと想定できる。

第3・4節より、罪悪感は道徳的自己の低下に応じて生じ、道徳的自己の回復のために行動を引き起こすことで道徳的自己の維持に資すると考えられる。道徳的自己の維持の観点から罪悪感の機能を捉えることにより、対人関係の維持機能からでは説明できなかった知見についての包括的・整合的な理解を可能にする。

## **第5節 本研究の目的**

第3節で述べたように、本研究の目的は罪悪感と道徳的自己の対応モデルを構築することである。そのために、研究1では罪悪感の機能が対人関係の維持に限定されない可能性を示す。研究2・3では罪悪感と道徳的自己の対応関係について直接的に検証する。さらに、研究4・5では罪悪感が道徳的自己の維持に資する行動を動機づけるかを検証する。具体的には、研究4では罪悪感が道徳的であることを求める反応を引き起こすこと、研究5では罪悪感が道徳に則した補償行動を促すことを示す。

## **第2章 罪悪感と道徳的自己の対応関係の検証**

### **第1節 罪悪感の対人関係の維持機能についての再検討(研究1)**

#### **研究1-1**

研究1-1では、対人関係上の危機が解消されても罪悪感の低下に結びつかない場合があることを明らかにし、対人関係の維持機能の観点だけでは罪悪感の変動が説明できないことを示す。対人関係上の危機の解消を示すものとして、被害者からの赦しに着目する。赦しの付与は対人関

係上の危機の解消・改善を意味する(Exline et al., 2004)。対人関係の維持機能の観点からは、被害者からの赦しにより加害者の罪悪感が低下すると予測される。一方、罪悪感が関係維持以外の機能を持つのであれば、赦しでは罪悪感は低下しないことが予測される。

## 方法

**参加者** 大学生 169 名(女性 97 名,  $M_{\text{age}} = 19.4$ )。

**要因計画** 1 要因 3 水準(赦しなし, 赦しあり, 統制)。

**手続き** 一斉教示・個別回答による質問紙実験を実施した。罪悪感の操作には場面想定法を用いた。始めに“買い物に行くために友人の A さんから自転車を借りた”というシナリオを呈示した。罪悪感喚起条件では“鍵の掛け忘れのために自転車を盗まれた”という内容が続き、統制条件では“そのまま自転車を A さんに返した”という内容が続いた。罪悪感喚起条件ではさらにシナリオが続き、その内容で赦しの有無を操作した。赦しあり条件では“A さんは「気にしなくてもいいよ」と言ってくれた”という内容が続き、赦しなし条件では“自転車が盗まれたことを知った A さんは悲しそうにしていた”という内容が続いた。参加者には呈示場面で抱く感情について回答するよう求めた(罪悪感の項目は薊(2009)より抜粋(e.g., 「罪悪感を感じる」), 以下の研究でも同様)。

## 結果と考察

罪悪感得点について、赦しあり条件( $M = 6.65$ ), 赦しなし条件( $M = 6.57$ )ともに統制条件( $M = 3.88$ )よりも高いのに対し( $ps < .001$ ), 赦しの有無での差は認められなかった( $t(166) = 0.52, p = .606, d = 0.10$ )。赦しにより対人関係上の危機が解消されたとしても、罪悪感は低下せず、対人関係の維持機能の観点だけでは罪悪感の変動を説明できない可能性が示された。

## 研究 1-2

研究 1-1 での罪悪感操作のシナリオ場面には被害と過失という 2 つの罪悪感の喚起に関わる要因が含まれていた。研究 1-2 では罪悪感の喚起要因を分けることで、対人関係上の危機とは独立した要因(i.e., 過失)からも罪悪感が喚起されることを示す。

## 方法

**参加者** 大学・短期大学の学生 214 名(女性 180 名,  $M_{age} = 19.6$ )。

**要因計画** 2(被害の有無) × 2(過失の有無)の 2 要因参加者間計画。

**手続き** 一斉教示・個別回答による質問紙実験を実施した。研究 1-1 と同様に、友人から自転車を借りる場面を呈示した。被害の有無は、自転車が盗まれたかで操作し、過失の有無は、自転車の鍵を掛けていたかで操作した。参加者には呈示場面で抱く感情について回答するよう求めた。

## 結果と考察

罪悪感得点について 2 要因分散分析を行った結果、被害の主効果( $F(1,209)=206.19, p<.001, \eta^2_p=.50$ )、過失の主効果( $F(1,209)=24.14, p<.001, \eta^2_p=.10$ )、および交互作用効果( $F(1,209)=12.62, p<.001, \eta^2_p=.06$ )が認められた。被害なし条件において、過失あり条件( $M = 3.61$ )で過失なし条件( $M = 2.73$ )よりも罪悪感得点が有意に高く( $t(209)=5.92, p<.001, d=1.56$ )、対人関係上の危機が罪悪感喚起の必要条件ではないことを示された。

## 第 2 節 道徳的自己の低下に着目した検討(研究 2)

研究 2 では、罪悪感と道徳的自己の対応関係に対する直接的な知見を得るために、道徳的自己を潜在連合テスト(Implicit Association Test (IAT); Greenwald et al., 2003)を用いて測定し、道徳的自己の低下と罪悪感の生起との関連について検討する。また、単なる罪悪感とネガティブな属性との関連ではないことを示すために、対照条件として自尊 IAT(全般的な自己の評価)を行う群を設ける。結果の予測としては、道徳 IAT でのみ、

統制条件よりも罪悪感喚起条件での IAT 得点が低くなると想定される。

## 方法

**参加者** 大学生 106 名(女性 40 名,  $M_{age} = 19.3$ )。

**要因計画** 2(罪悪感操作: 罪悪感喚起, 統制) × 2(IAT の種類: 道徳, 自尊)の 2 要因参加者間計画。

**手続き** IAT 課題(1 回目), 罪悪感操作, IAT 課題(2 回目)の順で行なった。実験は複数人で同時に行った。IAT 課題は Greenwald et al. (2003)の手続きに従った。道徳 IAT は分類カテゴリーを「自己-他者」「道徳-不道徳」とし, 自尊 IAT は分類カテゴリーを「自己-他者」「快-不快」とした。ブロックの実施順序は参加者間でカウンターバランスをとった。

罪悪感の操作は, カバーストーリーとして, 他の参加者と一緒に課題を行うと教示し, この課題によって参加者の罪悪感を喚起させた(Xu et al., 2012)。課題に不正解をするとパートナーに不快なブザー音が流されると教示した。罪悪感喚起条件では参加者が課題に不正解をし, パートナーに被害を与えてしまうよう設定した。統制条件では全問正解になる設定にした。課題終了後, 今現在の感情を回答するよう求めた。

## 結果と考察

罪悪感操作の操作チェックとして, 罪悪感喚起条件で統制条件よりも罪悪感得点が高いことを確認した( $t(59.64)=10.19, p<.001, d=2.05$ )。以下, 研究 4-1, 4-2, 5-1 でも同様の基準で操作チェックを行った。

次に IAT 得点を自己と道徳(自尊)が強く結びついているほど得点が高くなるように算出した。2 回目の IAT 得点について, 1 回目の IAT 得点を統制変数とし, 罪悪感操作(罪悪感喚起=1, 統制=0), IAT の種類(道徳 IAT=1, 自尊 IAT=0), ブロック順序(consistent-first=1, inconsistent-first=0)を説明変数とした最尤推定による回帰分析を行った。罪悪感操作×IAT の



種類の交互作用効果が認められ ( $\beta=-.14, z=-2.01, p=.044$ ), 道徳 IAT において罪悪感操作の有意な影響が認められた ( $\beta=-.23, z=-2.21, p=.027$ ; Figure 1)。しかし, 自尊 IAT では有意な影響は認められなかった ( $p=.553$ )。これらの結果は, 罪

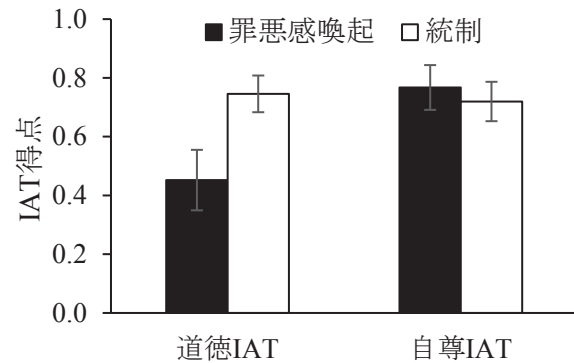


Figure 1. 罪悪感操作および種類別でのIAT得点

悪感の生起と道徳的自己の低下との対応関係を示すものである。

### 第3節 道徳的自己の高揚に着目した検討(研究3)

研究3では, 道徳的自己の高揚が罪悪感に及ぼす影響について検討する。道徳的自己は道徳行動によって高揚する(e.g., Jordan et al., 2011)。道徳的自己が高揚していると, 不道徳行動による道徳的自己の脅威が相殺される。罪悪感が道徳的自己の低下による脅威から生起するのであれば, 道徳的自己が高揚している場合には不道徳行動を行っても罪悪感は喚起されない, あるいはその程度が弱まることが予測される。

#### 方法

**参加者** 大学生 122 名(女性 28 名,  $M_{age} = 19.2$ )。

**要因計画** 2(道徳的自己の高揚: あり, なし)  $\times$  2(罪悪感操作: 罪悪感喚起, 統制)の2要因参加者間計画。

**手続き** 一斉教示・個別回答による質問紙実験を実施した。道徳的自己の高揚操作として, 高揚あり条件では友人への援助行動を, 高揚なし条件では先週の火曜日の出来事を想起・記述する課題を行った(e.g., Jordan et al., 2011)。次に, 場面想定法を用いて, 罪悪感操作を行った。シナリオ場面での被害者は, 高揚操作で想起した友人とした。シナリオには3種類の場面(①約束忘れ, ②共同課題の未提出, ③借物の欠損)を用いた

(Ohtsubo & Yagi, 2015)。参加者はいずれかの1つの場面に割り振られ、呈示場面で抱く感情についての回答を行った。

## 結果と考察

罪悪感得点について2要因分散分析を行った結果、交互作用が認められ( $F(1,118)=4.69, p=.032, \eta^2_p=.04$ )、罪悪感喚起条件で、高揚あり条件がなし条件よりも罪悪感得点が低いことが示された( $t(118)=3.21, p=.002, d=0.83$ ; Figure 2)。この結果は、道徳

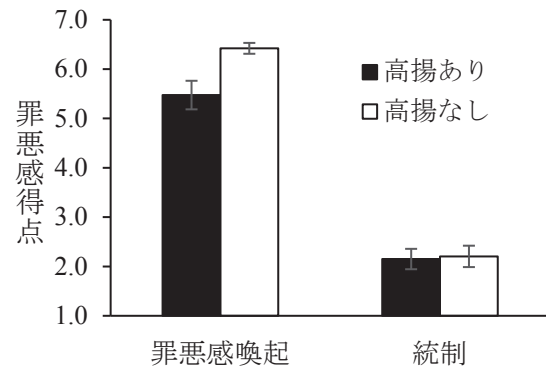


Figure 2. 罪悪感操作、高揚操作別での罪悪感得点

的自己の変動が罪悪感の生起に影響を及ぼすことを示している。

## 第4節 罪悪感による道徳性追求への影響の検討(研究4)

道徳的自己の低下に応じて罪悪感が喚起されるのであれば、罪悪感は道徳的自己の回復のために道徳に則する傾向を強めると考えられる。この点について、研究4-1では道徳的な振る舞いの重視に、研究4-2では洗淨行動に着目し検討する。

### 方法

**参加者** 研究1-1の参加者の一部、54名(女性28名,  $M_{age} = 19.4$ )。

**要因計画** 1要因2水準(罪悪感喚起, 統制)。

**手続き** 研究1-1の手続きに続いて、参加者に道徳的に振る舞うことの重視(e.g., “自制をしながら生きたい”, 辻岡・村上, 1975; 菅原他, 2006を基に作成)について回答するよう求めた。

## 結果と考察

罪悪感得点を媒介変数とした媒介分析において、罪悪感操作(罪悪感喚起=1, 統制=0)が罪悪感得点を介して、道徳重視に正の影響を及ぼしてい

た (indirect index = 0.31, Figure 3)。罪悪感の生起が道徳性への重視を強めることが示された。

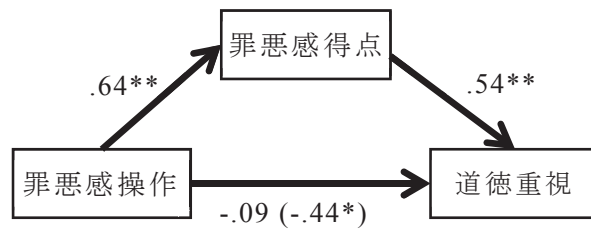


Figure 3. 媒介分析の結果

## 研究 4-2

### 方法

**参加者** 大学生 56 名(女性 29 名,  $M_{age} = 19.9$ )。

**要因計画** 1 要因 2 水準(罪悪感喚起, 統制)。

**手続き** 個別実施の実験室実験を行った。過去経験の想起を用いて罪悪感操作を行い, その後, 洗浄行動の指標として参加者がウェットティッシュを使用するかを観察した(e.g, Zhong & Liljenquist, 2006)。

### 結果と考察

ポリコリック相関分析の結果, 単項目の「罪悪感」と洗浄行動との間に正の相関関係が示された( $r=.38, z=2.16, p=.031$ )。この結果は, 罪悪感を感じた人が道徳的であることを求めることを示唆している。

## 第 5 節 罪悪感による道徳行動への影響の検討 (研究 5)

行為の道徳性の判断は, 行為の帰結を重視する帰結主義と過程を重視する形式主義に大別される(Brady & Wheeler, 1996)。どちらが重視されるかは文化によって異なり, 日本のように相互協調的自己観が優勢の場合には, 形式主義への関心が強い(Brockner et al., 2005)。それ故, 日本では道徳行動としては形式主義的パターンの行動が生じると予測される。

この予測の検証のために, 研究 5 では三者間の資源分配パラダイム(De Hooge et al., 2011)を用いる。このパラダイムでは被害者への補償(帰結の道徳性)だけでなく, 自己犠牲(過程の道徳性)が生じるかを弁別しての検証が可能となる。形式主義を重視する日本においては, 罪悪感が道徳に則した行動を引き起こすのであれば, 罪悪感形式主義的パターンでの

行動,具体的には自己犠牲を伴った補償行動を引き起こすと予測される。この点について,研究 5-1 では金銭的資源,研究 5-2 では時間的資源の分配を行う三者間の資源分配課題から検証する。

## 研究 5-1

### 方法

**参加者** 大学生 82 名(女性 35 名,  $M_{age} = 20.2$ )。

**要因計画** 1 要因 2 水準(罪悪感喚起, 統制)。

**手続き** 一斉教示・個別回答による質問紙実験を実施した。罪悪感の操作には研究 1-1 と同様の場面想定法を用いた。その後,参加者に先ほど呈示した場面の続きの状況において,所持金 5,000 円の中から A さん(被害者)と B さん(第三者)の誕生日祝いにそれぞれどれだけ支出するか,自分自身にどれだけ残しておくかの金銭分配に回答するよう求めた。

### 結果と考察

分配金額について,分配対象ごとに罪悪感操作の  $t$  検定を行った結果,被害者 ( $t(80)=3.20, p=.002, d=0.70$ )と自分自身 ( $t(80)=2.78, p=.007, d=0.61$ )への分配額に条件差

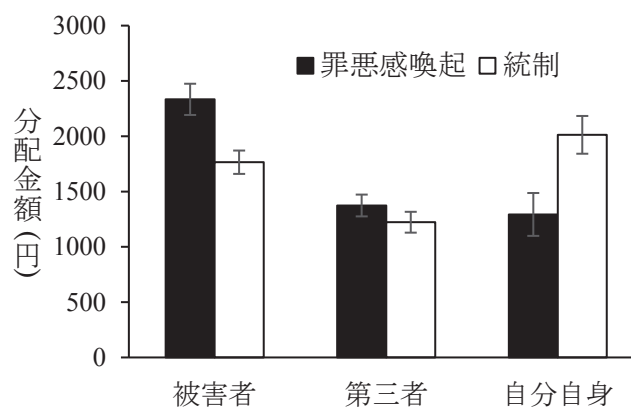


Figure 4. 条件別での各対象への分配額

が認められた。一方,第三者への分配額には罪悪感操作の影響が認められなかった(Figure 4)。

## 研究 5-2

### 方法

**参加者** 研究 1-2 と同一。

**要因計画** 2(被害の有無) × 2(過失の有無)の 2 要因参加者間計画。

**手続き** 研究 1-2 の手続きに続いて、参加者に時間についての資源分配課題を行うよう求めた。まず日曜日の予定を A さん(被害者), B さん(第三者), 自分自身のためにどのように使うかについての回答を求めた(1 回目の分配)。次いで、新たな場面として、土曜日の予定を上記の三者のためにどのように使うかについて回答するよう求めた(2 回目の分配)。

## 結果と考察

**1 回目の分配** 分配対象ごとに 2 要因分散分析を行った結果、いずれの対象についても被害の主効果が認められた(被害者,  $F(1,207)=31.36$ ,  $p<.001$ ,  $\eta^2_p=.13$ ; 第三者,  $F(1,207)=11.11$ ,  $p=.001$ ,  $\eta^2_p=.05$ ; 自分自身,  $F(1,207)=6.05$ ,  $p=.015$ ,  $\eta^2_p=.03$ )。被害あり条件(被害者,  $M=28.7\%$ ; 第三者,  $M=37.4\%$ ; 自分,  $M=33.8\%$ )では、被害なし条件(被害者,  $M=15.5\%$ ; 第三者,  $M=45.3\%$ ; 自分,  $M=39.2\%$ )に比べて被害者への分配時間を多くし、第三者と自分自身への分配時間を少なくしていた。

**2 回目の分配** 1 回目と同様の分析を行った結果、第三者に対し被害の主効果が有意であり( $F(1,207)=12.80$ ,  $p<.001$ ,  $\eta^2_p=.06$ )、自分自身に対し有意傾向で被害の主効果が認められた( $F(1,207)=3.61$ ,  $p=.059$ ,  $\eta^2_p=.02$ )。被害あり条件(被害者,  $M=28.7\%$ ; 第三者,  $M=27.2\%$ ; 自分,  $M=44.2\%$ )では、被害なし条件(被害者,  $M=30.5\%$ ; 第三者,  $M=17.1\%$ ; 自分,  $M=52.5\%$ )に比べて第三者への分配時間を多くし、自分自身への分配時間を少なくしていた。被害者への分配時間に差は認められなかった。1 回目と 2 回目の時間分配の結果を合わせて考察すると、第三者ではなく自分自身への時間を減らして被害者への時間を多くしていたと解釈できる。

以上の結果から、罪悪感が被害者に対する自己犠牲的な補償行動を促す、すなわち道徳に則した行動を引き起こすことが示された。

### 第3章 総合考察

#### 第1節 本研究の成果

研究1では罪悪感の機能が対人関係の維持に限定されない可能性を示し、研究2・3では罪悪感が道徳的自己の変動から影響を受けることが示された。さらに、研究4・5から罪悪感が道徳的自己の維持に資すると解釈できる行動を促すことが示された。これらの結果は、対人関係の維持機能の観点のみで罪悪感を捉えるのではなく、道徳的自己の観点から罪悪感の機能を捉えることに一定の妥当性があることを示している。

以上の結果を統合的に捉えることで、道徳的自己の変動の観点(e.g., Zhong et al., 2009)を加えた罪悪感の機能についての新たなモデルが提案できる。具体的には、罪悪感是自己への脅威(道徳的自己の低下)を知らせるシグナルとなり、その危機を解消する(道徳的自己の回復)ための行動を動機づける(Figure 5)。一方で、道徳的自己が高揚していると、脅威に対する猶予となり、それによって不道徳行動による罪悪感は抑制される(Figure 6)という、罪悪感の

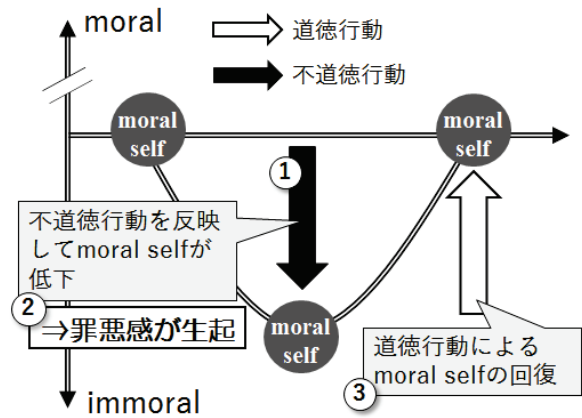


Figure 5. 道徳的浄化の過程モデル

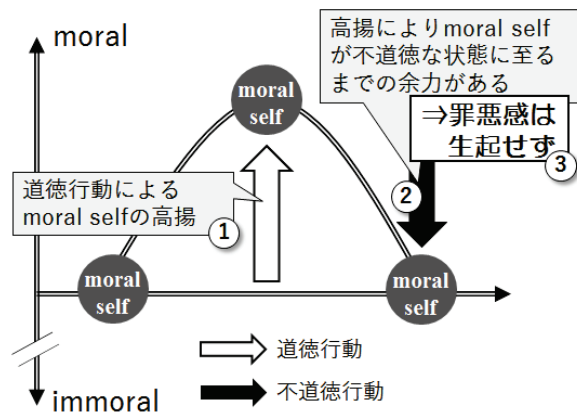


Figure 6. 道徳的高揚の過程モデル

生起が道徳的自己の状態に依存することを踏まえたモデルである。対人関係の維持機能の観点(Baumeister et al., 1994)からは、罪悪感が身体洗淨(Xu et al., 2014)などの対人関係に寄与しない行動と関連することへの説

明が難しかった。これに対して、道徳的自己の維持の観点からはこれらの行動が罪悪感により動機づけられるのは道徳行動として道徳的自己の回復に貢献するためであると統合的に理解できると考えられる。

## 第2節 今後の課題

前節で提案したモデルでは、罪悪感が道徳行動を引き起こし、道徳的自己を回復させるプロセスを想定している。しかしながら、道徳的自己の回復の過程については直接的な検証がされていない。そのため、罪悪感から動機づけられる道徳行動が実際に道徳的自己を回復させるか検討する必要があると考えられる。

## 引用文献

- 薊理津子 (2009). 屈辱感・羞恥感・罪悪感の状態尺度と恥, 罪悪感の特性尺度との関連性の検討 聖心女子大学大学院論集, 31, 95-108.
- Baumeister, R. F., Stillwell, A. M., & Heatherton, T. F. (1994). Guilt: An interpersonal approach. *Psychological Bulletin*, 115, 243-267.
- Brady, F. N., & Wheeler, G. E. (1996). An empirical study of ethical predispositions. *Journal of Business Ethics*, 15, 927-940.
- Brockner, J., De Cremer, D., van den Bos, K., & Chen, Y. R. (2005). The influence of interdependent self-construal on procedural fairness effects. *Organizational Behavior and Human Decision Processes*, 96, 155-167.
- Carlsmith, J. M., & Gross, A. E. (1969). Some effects of guilt on compliance. *Journal of Personality and Social Psychology*, 11, 232-239.
- Cogle, J. R., Goetz, A. R., Hawkins, K. A., & Fitch, K. E. (2012). Guilt and compulsive washing: Experimental tests of interrelationships. *Cognitive Therapy and Research*, 36, 358-366.

- Cryder, C. E., Springer, S., & Morewedge, C. K. (2012). Guilty feelings, targeted actions. *Personality and Social Psychology Bulletin*, *38*, 607-618.
- De Hooge, I. E., Nelissen, R. M. A., Breugelmans, S. M., & Zeelenberg, M. (2011). What is moral about guilt? Acting “prosocially” at the disadvantage of others. *Journal of Personality and Social Psychology*, *100*, 462-473.
- Eskine, K. J., Novreske, A., & Richards, M. (2013). Moral contagion effects in everyday interpersonal encounters. *Journal of Experimental Social Psychology*, *49*, 947-950.
- Exline, J. J., Baumeister, R. F., Bushman, B. J., Campbell, W. K., & Finkel, E. J. (2004). Too proud to let go: Narcissistic entitlement as a barrier to forgiveness. *Journal of Personality and Social Psychology*, *87*, 894-912.
- Gneezy, A., Imas, A., Brown, A., Nelson, L. D., & Norton, M. I. (2012). Paying to be nice: Consistency and costly prosocial behavior. *Management Science*, *58*, 179-187.
- Greenwald, A. G., Nosek, B. A., & Banaji, M. R. (2003). Understanding and using the implicit association test: I. An improved scoring algorithm. *Journal of Personality and Social Psychology*, *85*, 197-216.
- Jordan, J., Mullen, E., & Murnighan, J. K. (2011). Striving for the moral self: The effects of recalling past moral actions on future moral behavior. *Personality and Social Psychology Bulletin*, *37*, 701-713.
- 大平英樹 (2010). 感情心理学・入門, 有斐閣
- Ohtsubo, Y., & Yagi, A. (2015). Relationship value promotes costly apology-making: Testing the valuable relationships hypothesis from the perpetrator's perspective. *Evolution and Human Behavior*, *36*, 232-239.



- Roseman, I. J., Wiest, C., & Swartz, T. S. (1994). Phenomenology, behaviors, and goals differentiate discrete emotions. *Journal of Personality and Social Psychology, 67*, 206-211.
- 菅原健介・永房典之・佐々木淳・藤澤文・薊理津子 (2006). 青少年の迷惑行為と羞恥心—公共場面における5つの行動基準との関連性—  
聖心女子大学論叢, *107*, 57-77.
- Swedene, J. K. (2005). Feeling better about moral dilemmas. *Journal of Moral Education, 34*, 43-55.
- Tangney, J. P., & Dearing, R. L. (2002). *Shame and guilt*. New York, NY: Guilford Press.
- Tracy, J. L., & Robins, R. W. (2006). Appraisal antecedents of shame and guilt: Support for a theoretical model. *Personality and Social Psychology Bulletin, 32*, 1339-1351.
- 辻岡美延・村山繁 (1975). 価値観の六次元—因子的真実性の原理による尺度構成— 関西大学社会学部紀要, *7*, 161-174.
- West, C., & Zhong, C. B. (2015). Moral cleansing. *Current Opinion in Psychology, 6*, 221-225.
- Xu, H., Bègue, L., & Bushman, B. J. (2012). Too fatigued to care: Ego depletion, guilt, and prosocial behavior. *Journal of Experimental Social Psychology, 48*, 1183-1186.
- Xu, H., Bègue, L., & Bushman, B. J. (2014). Washing the guilt away: Effects of personal versus vicarious cleansing on guilty feelings and prosocial behavior. *Frontiers in Human Neuroscience, 8*, 97.
- Zeelenberg, M., & Pieters, R. (2006). Feeling is for doing: A pragmatic approach to the study of emotions in economic behavior. In D. De Cremer,

- M. Zeelenberg, & J. K. Murnighan (Eds.), *Social psychology and economics* (pp. 117-137). Mahwah, NJ: Erlbaum.
- Zhang, H., Chen, S., Wang, R., Jiang, J., Xu, Y., & Zhao, H. (2017). How upward moral comparison influences prosocial behavioral intention: Examining the mediating role of guilt and the moderating role of moral identity. *Frontiers in Psychology, 8*, 1554.
- Zhong, C. B., & Liljenquist, K. (2006). Washing away your sins: Threatened morality and physical cleansing. *Science, 313*, 1451-1452.
- Zhong, C. B., Liljenquist, K., & Cain, D. M. (2009). Moral self-regulation: Licensing and compensation. In De Cremer (Ed.), *Psychological perspectives on ethical behavior and decision making* (pp. 75-89). Charlotte, NC: Information Age Publishing.
- Zhong, C. B., Strejcek, B., & Sivanathan, N. (2010). A clean self can render harsh moral judgment. *Journal of Experimental Social Psychology, 46*, 859-862.